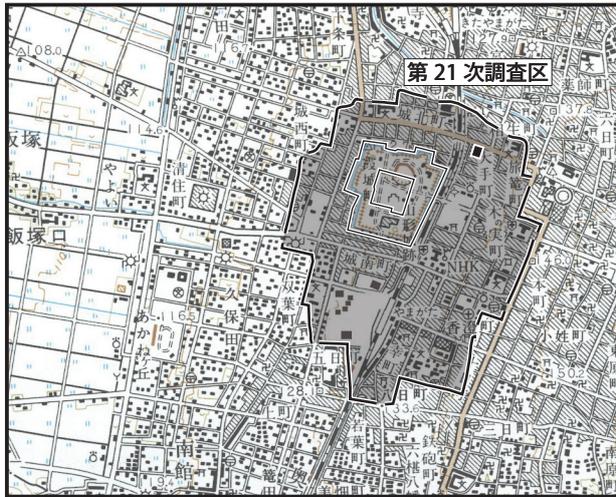


やまがたじょうさんのまるあと
山形城三の丸跡 (第 21 次)

遺跡番号 201-003
調査回数 第 21 次
所在地 山形県山形市大手町
北緯・東経 38 度 15 分 29 秒・140 度 20 分 05 秒
調査委託者 国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所
起因事業 一般国道 112 号霞城改良事業
調査面積 100 m²
受託期間 平成 31 年 4 月 1 日～令和 2 年 3 月 31 日
現地調査 令和元年 5 月 8 日～6 月 28 日
調査担当者 小林圭一 (現場責任者)・高桑 登・色摩優吾
調査協力 山形市上下水道部・山形市教育委員会・山形県村山教育事務所
遺跡種別 集落跡・城館跡
時代 近世・近代
遺構 溝跡・土坑・柱穴・河川跡
遺物 土師器・陶磁器・石製品 (文化財認定箱数：6 箱)



遺跡位置図 (1 : 50,000)

調査の概要

山形城三の丸跡は、霞城公園のある山形城 (本丸・二の丸) を取り囲む東西約 1.6km、南北約 2km の広大な城館跡で、文禄・慶長年間 (1592～1615 年) に最上氏第 11 代当主の最上義光が、三重の堀を構えた城郭として整備したと言われており、国内では 5 番目の広さで、奥羽地方では最大の城であった。しかし、最上氏は元和 8 年 (1162 年) に第 13 代義俊が改易され、それ以降鳥居氏から水野氏まで藩主が転封・入部を繰り返す、石高も 57 万石から 5 万石まで削減された。そのため、しだいに広大な山形城を維持することが困難となり、手入

れが行き届かず、幕末期の水野氏 5 万石時代には三の丸のほとんどが水田や畑になっていたと言われている。

今回の発掘調査は、国道 112 号の霞城改良工事に起因するもので、平成 23 年度の第 9 次調査、24 年度の第 11 次調査、25 年度の第 13 次調査、26 年度の第 14 次調査、27 年度の第 16 次調査、28 年度の第 18 次調査、29 年度の第 20 次調査に続いて実施されたもので、P 6 区 (第 20 次調査区の西隣) の発掘を実施した。また、今年度の発掘調査をもって国道 112 号拡張工事に起因する調査は終了となる。

遺構と遺物

主な遺構は、調査区の南側で石組遺構 (SX2710) を検出した。調査区の大部分は河川からの流れ込みの河原石で覆われており、そうした石を配置し、中を掘り込んで石組の施設が構築されている。南北に 1.6 m、東西に 1.1 m を測り、具体的な用途は不明だが、水路や洗い場として利用されたと考えられる。また、調査区の中央部分では近代からの攪乱 (SX2701) を受けていた。

主な遺物は、石組水場遺構に集中しており、遺構内からは 18 世紀後半から 19 世紀にかけての磁器などが出土した。内訳は碗が 9 点、皿、播鉢、砥石がそれぞれ 1 点ずつ出土している。磁器は主に肥前 (現在の佐賀県) で焼かれたもので完形に近い状態の磁器碗も出土してい

る。また、北側の遺構（SK2702）とその周辺からは、かわらけが2点出土している。

まとめ

今回検出した水路跡や水場跡は、第20次調査でも同じような水場遺構が見つかっており、今回の調査区はその延長上となっている。

今回の調査では、遺構・遺物ともに18世紀後半から19世紀にかけての比較的新しいものが中心となったが、2011年から始まった山形城三の丸跡の全体をみると、江戸時代に武家屋敷が形成される以前から古代において人々の生活が確認され、近代の山形市の都市形成につながっていったと考えられる。



図1 遺構配置図



写真1 石組水場遺構 (SX2710)



写真2 石組水場遺構より出土した遺物 (磁器と砥石)